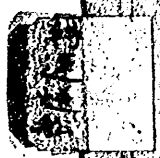


皇(年五)

清書濟

特別運送  
舟公

皇(年五)



1308

旅順口著何回開塞給「」の戦記例に倣う

1309

第十三章 特別運送船

第一節 報國丸

本船ハ第一回旅吹口開塞船ノ一ニシテ明治三年  
 六月蘇格蘭・北ノ製造ノ機具ハ直五二段膨脹  
 二汽筒式様城一基及ヒ両面筒式罐二個ヲ備フ  
 而シテ開塞船トシテ使用シタル當時ハ主様城最大  
 回転約四十二連力・約八哩ナリキ様長ハ海軍  
 大機関士栗田富太郎ニシテ部下ノ機関部下士卒

機関士栗田富太郎

合シテ十二名之ヲ二分シテ二直配置ト爲シ每直檣  
 室ニ二名及ヒ一室ニ四名ヲ配シ非番直員ハ炊事  
 及ヒ甲板上ノ事業ヲ助ケシム  
 本船ヲ閉塞船トシテ使用スルニ先タケ其ノ檣  
 部ニ特ニ施設シタル事項ハ燈光ノ外方ニ漏ル  
 ヲ防クカ爲メ檣室天窓ノ周囲ニ帆布覆ヲ掩  
 ヒ又目的ヲ達シテ港口ニ至リタル后浸水ヲ  
 易ナラシムルカ爲メ主注射管ノ端接付ヲ海

水筒ヨリ取外し置キタル。過キス尤●船体ヲ爆  
 破スルノ手續トシテ機室発庫座ノ下方。十  
 六<sup>斤</sup>四合一ノ綿火薬四<sup>罐</sup>個ヲ埋メ豫備火床ノ機  
 及ヒ石炭等ヲ充メ其ノ上方ヲ掩ヒ又左舷側  
 内舷、接シテ六<sup>寸</sup>●彈丸六個。各時限信管ヲ  
 装着シタルモノヲ縛着シ發火電池及ヒ電線ハ  
 孰シモ之ヲ軸室内ニ置キ着クハ之。沿テ後部  
 ノ空氣抜管ヨリ最高後甲板ニ導キ此處ニ電

鑪ノ装置セリ

旅吹口閉塞ノ目的ヲ以テ、全方面ニ向テ進航中  
機室ニ起リタル故障ハ、鑪焰管端ノ漏洩、レ  
テ途中ニ於テ、其ノ最甚シキモ、二本ノ塞栓セ  
リ而シテ全方面ニ止ツ、ニ及ビ、從來使用シツ、  
アリシ和炭ノ英炭ニ代ヘ、且港口ニ止ツ、ニ及  
シ大俵衝突用意ノ要領ニ從ヒテ機室ヲ操縦  
セリ但シ全カ後退ノ場合ニ於テ鑪、沸溢ヲ起ス

ト香トハ唐モ顧慮セサリキ港口、達セレトス  
ル少許前敵ノ防禦砲火、依リ船橋救命艇及ヒ  
機械室天窓等ヲ破壊セラルタルモ主要部ニハ  
何等ノ故障ナク、既、港口、達シタル後機兵部  
欠ハ鑽ノ安全弁ヲ啓開シ機械室、於ル蒸氣  
加減弁ヲ閉鎖シ終リテ自兵部欠ノ掌ル船体  
爆破ノ作業ニ助力セリ


單  
文  
原  
形

注  
耳

1315



第二節 仁川丸

本船は第一回旅吹口開塞船、一、一、一、明治十年十月蘇格蘭、於て製造し、機軸は直三段膨脹三汽筒式機軸一基、編者曰、本船は機軸の製造當時二段膨脹式ナリ、後甲三段膨脹式に改造シタルモノナリト云フ、西面圖式機軸二台、油、而して軍艦トシテ使用シタル當時の主機

械、最大回転五十四速力、八漕ナリキ機長

ハ海軍<sup>大</sup>兵士南澤安雄ニシテ部下ノ機関部

下士卒合シテ十二名之ヲ二分シテ二直配置ト為シ

毎直機械室ニ二名及ヒ正室ニ四名ヲ配シ正室当直

員ノ内一名ハ伝令兼從卒ノ任ニ當ラシメ所塞遂行ノ

際ハ非番直ノ内一名ハ投錨ノ任ニ當リ其ノ他ハ

総テ退却用ノ端舟ヲ準備セシム

水船ヲ所塞船トシテ使用スルニ先タケ其ノ機関部

特、施設シタル事項ハ上甲板ニ在ル巻揚機  
 等ヲ破壊シテ<sup>後</sup>從來敵ノ引揚事業<sup>等</sup>之ヲ使用スル  
 コト能ハサラシメ又目的ヲ達シテ港口ニ至リ  
 ル後侵襲ノ容易ナラシムルカ爲メ各主隔壁ノ錠  
 釘ヲ切断シテ一區劃ニ浸水セシ直ニ他ノ若巨劃  
 ニ普及スル準備ヲ爲シ尙豫備トシテ主機自若  
 ノ循環用海水吸管ヲ破壊スルノ準備ヲ爲セリ  
 旅吹口閉塞ノ目的ヲ以テ各方面ニ向ヒ進航中機

戦艦原高

閘、ハ何等ノ故障ノ起サ、リシト雖モ元來本船  
 ハ一、回用寒船隊ノ使、回隻、比シ速力低、全  
 速力、於テ幸、ツシモ八哩、出、足、ル、ニ、殊、  
 南、航、於、ル、鐘、捕、造、軍、艦、於、ル、モ、ト、向、テ、其  
 ノ、趣、ヲ、異、ニ、ス、ル、ト、拘、ラ、ス、之、カ、焚、火、ニ、從、テ、ス、ル、兵  
 各、ハ、各、所、ヨリ、集、合、セ、ル、モ、ノ、シ、テ、從、來、機、械、室  
 又、ハ、補、助、機、械、室、欠、ツ、リ、シ、モ、ア、ラ、ツ、テ、終、始、鐘  
 ノ、蒸、氣、圧、力、ヲ、一、定、ニ、維、持、ス、ル、コ、ト、能、ハ、ス、澎、  
 旅

順口方面、近シ、隨ヒ濃煙ヲ噴出シテ敵、悟ラ  
レサラニカ爲メ和炭ヲ棄レシ代リ、煉炭ヲ使  
用スル筈ナリシモ之ヲ使用セハ圧力益、低下シ  
逐、先導船、遅レシトスルニ至リシヲ以テ止ム  
ヲ得オ引續キ和炭ヲ使用セリ  
始、港口、達シテ閉塞ノ目的ヲ遂ケ投錨シタル  
後機兵ヲ停止スル規約ナリシカ港口ニ向ヒ突進  
中機兵船底、激然タル激動ヲ感スルト同時ニ機

体火し、傾斜し始メタリ是に於テ指揮官ヲ總  
 負上ハ、令アリ依リテ直ニ主機械ヲ停止し船底  
 ノ爆破・用ユル電池ノ電纜ヲ拵續し終リテ上  
 甲板・出テ後退船セリ此ノ時退敵ノ防禦砲火  
 に依リ機兵ニ何等ノ損害ヲ蒙ラサリシモ此  
 時始メテ敵ノ一彈来リテ煙突ヲ破壊スルヲ認メ  
 シリト之ヲ

第三節 武州丸

本船ハ廿一回旅吹口閉塞船ノ一ニシテ明治十六年

九月英國、於テ製造ニ據異、直立ニ段膨脹ニ

汽筒式機一基及ヒ圓筒式機二個ヲ備、而シテ

塞船トシテ使用シタル當時ハ此機ノ最大

乾七十連力、十一哩ナリキ機異長、海軍少將

園士杉政ノシテ都立ノ機異部下士官十名之

機異部

ヲ二分シテ二直配置ト爲シ之々機材室及ヒ缶室ニ  
 当直セシメ閉塞遂行ノ際ハ非番直ノ内ニ名ヲ傳令  
 ニ當テ也ノ二名ヲ后部ニ於テ投錨ノ任ニ當テ尚  
 他ノ一名ヲ前部ニ於テ投錨ノ任ニ當ラシム  
 本艇ノ閉塞艇トシテ使用スルニ急々其ノ機材部  
 ニ特ニ施設シタル事項ハ只各種ノ應急修理用具  
 ト多量ノ潤滑油ヲ用意シ且閉塞遂行ノ際艇  
 橋ト機材室トノ間ノ留詰管破壊セラシムル件ノ



準備トシテ機械、故障アル片ハ機械室ヨリ又機  
 械ノ使用已メ全ク了リタル時ハ船橋ヨリ共ニ機  
 械室通信器ヲ前後進ニ既度ニ動カス規約ヲ定メ  
 タルノニ尤モ船体ヲ爆破スルノ準備トシテ機械  
 室右舷發停座ヨリ約六呎遠方ノ舷側ニ橋シ十  
 六呎<sup>所</sup>四方ノ一ノ綿火薬罐三個ヲ装置シ其上  
 方ニ豫備火床ノ機ヲ十個ニ重子發火電池ヲ  
 軸室内一段高キ所ニ置キ又機械室右舷側ニ

於レ後方陣壁ニ接ニ時限信管ヲ導キタル六  
甲彈丸ニ似テ裝置セリ

旅順口軍寨ノ目的ヲ以テ全方面ニ向ヒ進

航中機集ニハ何等ノ故障ヲ起サズ向テ港

口ニ近ツキタルトキハ航橋・弁・儀・機

ヲ出來得ル丈ケ多ク回転セシメ又其ノ用

的ノ位置ニ達シテ拉錫スルニ至ル迄敵

ノ防禦砲火ニ依リ機集・何等ノ損害ヲ受ケ

戦 国 原 高	<div style="text-align: right; padding-right: 20px;">           サ            リ            キ         </div>
------------------	--

1326

取  
引  
月  
希

海  
軍

1327

122

第四節 福井丸

本船ハ第二回旅順口閉塞船ノ一ニシテ明治十五年三月英國ニ於テ製造シ機関ハ直立二段膨脹二汽筒式機械一基及ヒ西面四筒式罐二個ヲ備フ而テ閉塞船トシテ使用シタル當時ハ主機械ノ最大回轉約五十速力ハ一哩ナリキ機関長ハ海軍大機関士栗田富太郎ニシテ部下ノ配置及ヒ本船ヲ閉

機関士栗田富太郎ニシテ部下ノ配置及ヒ本船ヲ閉

塞船トシテ使用スルニ先<sup>ニ</sup>其ノ機関部ニ特ニ施  
 設シタル事項等ハ大体ニ於テ第一回閉塞船ノ一  
 タル報國丸ニ於ルモノニ等シ但亦<sup>（此等事項等ハ第一回閉塞船ノ一  
 タル報國丸ニ於ルモノニ等シ）</sup>船<sup>（此等事項等ハ第一回閉塞船ノ一  
 タル報國丸ニ於ルモノニ等シ）</sup>ニハ從來船  
 橋ト機械室間ニ傳話管ノ設備ナカリシヲ以テ  
 之ヲ假設セリ  
 旅順口閉塞ノ目的ヲ以テ同方面ニ向ヒ進航中機  
 関ニ何等ノ故障ヲ起サス同方面ニ近<sup>（此等事項等ハ第一回閉塞船ノ一  
 タル報國丸ニ於ルモノニ等シ）</sup>シ<sup>（此等事項等ハ第一回閉塞船ノ一  
 タル報國丸ニ於ルモノニ等シ）</sup>ニ及<sup>（此等事項等ハ第一回閉塞船ノ一  
 タル報國丸ニ於ルモノニ等シ）</sup>テ  
 從來使用シツ、アリシ和炭ヲ英炭ニ代<sup>（此等事項等ハ第一回閉塞船ノ一  
 タル報國丸ニ於ルモノニ等シ）</sup>ヘ且港口

二 折<sup>レ</sup>死<sup>ニ</sup> 及<sup>テ</sup> 大<sup>ニ</sup> 併<sup>シ</sup> 衝突<sup>ス</sup> 用<sup>意</sup> ノ 要<sup>領</sup> = 從<sup>テ</sup> 機<sup>関</sup> ヲ  
 操<sup>縦</sup> セリ 但<sup>シ</sup> 全<sup>ク</sup> 力<sup>ヲ</sup> 後<sup>退</sup> ノ 場<sup>合</sup> = 於<sup>テ</sup> 罐<sup>ニ</sup> = 沸<sup>溢</sup> ヲ 起  
 ス ト 否<sup>ト</sup> ハ 毫<sup>モ</sup> 顧<sup>慮</sup> セ サ リ キ 而<sup>テ</sup> 港<sup>口</sup> = 牽<sup>シ</sup> 錨<sup>ヲ</sup>  
 ヲ 投<sup>下</sup> ス ル = 至<sup>ル</sup> 迄 敵<sup>ノ</sup> 防<sup>禦</sup> 砲<sup>火</sup> = 依<sup>リ</sup> 幸<sup>ニ</sup> = 機  
 関<sup>ノ</sup> 主<sup>要</sup> 部<sup>ニ</sup> = 損<sup>害</sup> ヲ 蒙<sup>ラ</sup> サ リ キ 斯<sup>テ</sup> 機<sup>関</sup> 部<sup>員</sup> ハ  
 罐<sup>ノ</sup> 安<sup>全</sup> 弁<sup>ヲ</sup> 啓<sup>開</sup> シ 機<sup>械</sup> 室<sup>ニ</sup> = 於<sup>ル</sup> 主<sup>蒸</sup> 氣<sup>弁</sup> 加<sup>減</sup> 弁<sup>ヲ</sup>  
 ヲ 閉<sup>鎖</sup> シ 終<sup>リ</sup> テ 水<sup>兵</sup> 部<sup>員</sup> ノ 掌<sup>ル</sup> 船<sup>中</sup> 爆<sup>破</sup> ノ 作<sup>業</sup>  
 = 助<sup>カ</sup> セリ

年  
月  
日



第五節 永山丸

本船ハ第二回旅順口閉塞船ノ一ニシテ明治十六  
 年英國ニ於テ製造シ機關ハ直立ニ改膨脹ニ汽筒  
 式機械及ヒ円筒式罐二個ヲ備フ而テ閉塞船トシ  
 テ使用シタル當時ハ主機械ノ最大回転六十二速  
 カ十哩五ナリキ機關長ハ海軍少機關士村政人  
 ニシテ同官ハ部下ノ根原部式在ナリ  
 嘗テ葉一

機 原 高

毎 五

和 平 機 械 部 下 士 卒 令 士 卒 令 士 卒 令

回ノ閉塞隊ニ参加シタル経験ニ鑑ミ單ニ機械ト  
 在トノ受持ヲ區別シタルノミニテ別ニ直ラ定メ  
 ス命スルニ閉塞事業ヲ決行スルニ至ル迄交々  
 直ニテ本船ヲ豫定ノ位置ニ進入サル一カヲサル  
 コトヲ以テセリ是等兵員ハ意志ノ最堅固ナルモ  
 ノナルヲ以テ各員孰レモ愉快ニ且自ら進テ直  
 セリ而テ愈々港口ニ突進スル時ハ機械室ニ二名  
 銃室ニ三名傳令ニ二名諾典砲員第投鎗助手ニ二

名及ヒ後部機械水雷ノ落下助手トシテ  
セリ

亦船ヲ閉塞船トシテ使用スルニ先  
其ノ機關部

ニ特ニ施設シタル事項ハ杉機關長ノ第一回閉塞

隊ニ参考カシタル經驗ニ鑑ミ機械室艙口上部ノ鉄

楯子上ニ船内ニ在リシ席類ヲ敷キ並ニ以テ天窓

等ノ破片ヲ室内ニ落下セシメサラシムル準備ト

爲シ但万一敵彈等ノ爲メ此ノ席ニ引火スルコト

戦史原稿

之ヲ設置ス

アルモ毫も南セザル決心ナリキ又亦船ニハ船橋

後集

ト機械室向ニ後集傳話管ノ設備ナカリシモ在

ノ焚火室ハ幸ニ船橋ニ近ク指呼ノ向ニ在ルヲ以

テ左室ヲ全テ船橋ト機械室トノ通信連絡ヲ取ル

コトノシ且豫備トシテ機械ニ故障アル時ハ機械

室ヨリ又機械ノ使用已ニ全ク了リタル時ハ船橋

ヨリ共ニ機械室通信器ヲ前後集ニ為度モ動カス

規約ヲ設定セリ而テ船体ヲ爆破スルニ用ユル綿

火藥ハ概關部ニ在リテハ一ヲ右舷石炭庫内ニ他  
 ノ一ヲ機械室右舷側ニ装置セリ  
 旅順口閉塞ノ目的ヲ以テ同方面ニ向ヒ進航中機  
 関ニハ何等ノ故障ヲ起サス而テ港口ニ近近カ  
 付ハ船橋ノ命ニ依リ機械ヲ出未得ル大ケ多ク回  
 転セシメタリシカ由未本船ノ機械ハ蒸氣圧力通  
 常使用圧力ヨリ僅ニ十听ヲ下ルモ尚發停スルコ  
 ト中得サル能ハ故ナリ障加フルニ發停機械ノ運轉ハ蒸

氣力ノシニテハ其ノ力不足シ常ニ人守ヲ以テ之  
 ヲ助ケサルハカラサリシニ既ニ港口ニ入リテ目  
 的ノ位置ニ達シ投錨シタル後前進一杯ヨリ  
 右進一杯ニ変シタル中船最後ノ機関ノ運転ニ幸  
 ニ凝滞ナク頗ル巧サニ操縦スルコトヲ得タリ也  
 ルニ恰モ此ノ刹那ニ於テ敵ノ防禦砲火ノ爲メニ  
 罐ヲ破ラレ編者曰ク杉柵圍長<sup>以當時</sup>ノ罐ノ破ラレタル  
 モノト思考シタルモ或ハ蒸氣管ヲ破ラレタリシ

ヤモ知レスト云フ(蒸氣噴出しテ為メニ機庫ノ  
 燈火ハ殆ト全部消滅セリ是ニ於テ機庫長ハ機庫  
 庫ニ在リシ兵員ニ上甲板ニ上ルヘキヲ命シ自ラ  
 心中切ニ在リシ兵員全部ノ屍体ヲ発見ス  
 一キヲ期シツ、在庫ニ至リシニ一屍体ヲモ存セ  
 ス依リテ再機庫ニ飯未ニタルニ機庫ハ尙極メ  
 テ静ニ右艙ニ運轉シツ、アリシヲ以テ主蒸氣加  
 減弁ヲ閉鎖シ(編者曰ク機庫長后ニ至リテ之ヲ

戦史原稿

考ウルニ既ニ缶ハ破ラレ加フルニ船ハ既ニ投錨  
 右ナルヲ以テ例ニ主蒸氣加減弁ヲ閉鎖セサルモ  
 機械ハ自然ニ運轉ヲ停止シタルモノト思考シ  
 タリト云フ(終リテ上甲板ニ上リタルニ前ニ缶室  
 ニ在リシ兵員ハ皆既ニ在リ而テ曰<sup>ハ</sup>所ニ依レハ  
 走ラ破ラルハサ許前石炭庫内ヨリ石炭夥シク躍  
 出シ到底缶室ニ在リテ作業ニ能ハサルニ至リシ  
 ヲ以テ上甲板ニ上リタリト<sup>云フ</sup>思フニ<sup>ハ</sup>之レ敵ノ



駆逐艦ヨリ放ケタル水雷石炭庫ニ軍中ニタルカ  
 為メナラン蓋本船ノ正ハ前部ヨリ右部ニ向テ焚  
 火スル装置ナルヲ以テ焚火室ト機械室トノ巨離  
 遠ク然モ其ノ間ニ傳話管ノ設備ナク加フルニ其  
 ノ間ノ通路ハ幅非常ニ狭ク且其ノ内ニ階級アリ  
 容易ニ通信連絡ヲ為スコト難キヲ以テ万止ムヲ  
 得サル場合ニハ正室員ハ機械室ノ軍ヲ待タス上  
 甲板ニ避難スヘシト豫テ命令アリシカ故ナリ

因ニ言フ 檣械室 艙口上部ノ 鉄格子 上ニ敷並ヘ  
 タル 葎類ハ亦 船港口ニ突進 スル 階大ニ効力ヲ  
 現ハシ 敵ノ防禦 砲火ニ依リ 檣械室 天窓附近ヲ  
 甚ニク 破壊セラシタルモ 破片ノ室内ニ落下ス  
 ルモノ 皆無ナリキ コトニシテ

第六節

汽機

本船ハ第二回旅順口閉塞船ノ一ニシテ明治二十

一年蘇格蘭ニ於テ製造シ機関ハ直立三段膨脹三

汽筒式機械一基及ヒ高田筒式躍二個ヲ備フ而テ

閉塞船トシテ使用シタル當時ハ主機械ノ最大回

轉數六十四速力ハ約十哩ナリキ機関長ハ始メ第

一回旅順口閉塞ノ際武陽丸ノ機関長タリシ海軍

海軍

海軍

中機関士大石親徳ナリシカ本船閉塞遂行ノ前數  
 日前部船倉ニ爆発用トシテ六尹彈丸ヲ装置中過  
 切テ船艙ニ墜落シ頭部ニ負傷シタルヲ以テ海軍  
 大機関士小川英雄之ニ代リタルモノナリ部下ノ  
 機関部下士卒ハ合シテ十名ニシテ之ヲ二直ニ配  
 置シ毎直機械室ニ三名定室ニ四名ヲ配セリ  
 本船ヲ閉塞船トシテ使用スルニ先ケ其ノ機関部  
 ニ特ニ施設シタル事項ハ主トシテ大石前機関長

ノ茅一回閉塞ノ実験ニ鑑ミ設計シタルモノニシ  
テ機軸室ト茅四番船艙トノ間ノ隔壁ノ釘鉋ヲ切  
断シ且其ノ鉄釘ノ一部ヲ取外シ茅四番及ヒ茅五  
番船艙間ノ隔壁ヲ打破シ軸室及ヒ炭庫ノ防水扉  
ヲ取外シ茅四番及ヒ茅五番ハラストタンクヲ端  
水ニテ軸室ニ在ル同上タンクニ通スル筭及ヒ筭  
竹箱ヲ取外シ又茅一番及ヒ茅二番ハラストタンク  
ニ通スル筭及ヒ筭竹箱(機軸室ニ在リ)ヲモ取外シ

戦史原稿

海軍

テ同上「タンク」ニ充水スル準備ヲ為シ船外ニ通ス  
 ル是ノ駆水鼻及ヒ補助缶ノ駆水鼻並ニ機械室ニ  
 在ル主補海水嘴(機一)ヲ容易ニ取外シ得ル様各母  
 螺二個ヲ残シテ其ノ他ヲ取外シ主補キングスト  
 ン管ニ通スル管ヲ破壊用意トシテ斬金ニテ傷ケヌ  
 之ハ急準備トシテ船取機械ヲ破壊セラレタル場合  
 ニ右部ノ巻揚機械ヲ代用スルノ準備ヲ為シ機械  
 室ニ各種ノ応急修理用具同材料並ニ管破壊用ト

シテ大銃等ヲ準備セリ

旅噴口閉塞ノ目的ヲ以テ同方面ニ向ヒ進航中機  
関ニ何等ノ故障ヲ起サス同方面ニ近グニ及ビテ  
從來使用シツヽアリシ和炭ヲ英炭ニ代ヘ且港口  
ニ近グニ及レテ補助缶ノ使用ヲ止メ第一番及ヒ  
第二番バラストタンクニ充水シ其ノ他既ニ取外  
シテモ支障ナキ弁及ヒ嘴ヲ侵水準備トシテ取外  
セリ而テ石雷ノ如キ敵ノ防禦砲火ヲ衝テ益々進

ムニ隨ヒ何時主極機逆轉ノ令アルモ差支ナキ準  
 備ヲ爲シタリシカ既ニ目的地莫ニ達シ全速右退  
 ノ令アルヤ直ニ主蒸氣加減弁ヲ啓閉シタル俟  
 斷算ノシラ閉鎖シリシク逆轉ノ位置ニ変更シ  
 終リテ直ニ度斷算ヲ(完)啓シタルニ容易ニ全カ右  
 退ニ發動セシムルコトヲ得タリ幾モナクシテ主  
 機械停止ノ令アリ次テ浸水着付ノ令アリタルヲ  
 以テ豫メ定ムル所ノ弁嘴及ヒ管ヲ破壊セシム其



ノ音砲声ト相和ヒテ光景頗ル凄愴タリ此ノ時敵  
 彈補助砲ニ庫中ニタルモノ、如ク左庫室ヨリ盛  
 ニ蒸氣ヲ噴出セリ斯テ豫定ノ鼻嘴等ヲ悉ク破壊  
 シ終シハ海水ハ龍ノ如ク揚揚室及ヒ左庫室ニ奔入  
 シ勿ク敷板上ヲ浸スニ至リ次テ上甲板ニ上シリ


年  
月  
日  
希

日  
年